

「いらつしやい、可愛い私の娘。…デュエロに勝利した割には、随分浮かない顔じゃなくって？」

スマレは、先日行われたアルカナデュエロにおいて、見事な勝利を収めたとは思えない程、憂い顔の娘を迎えた。

「…マンマ」

「とりあえずお座りなさいな、お茶を淹れて上げるわ」
「…うん」

スマレの淹れてくれたお茶のカップを、両手でくんで口を付ける。スマレの淹れてくれるお茶は、ルカが淹れてくれるのとは色も香りも違う。たまにしか淹れてくれないけれども、フェリチータはこのお茶の香りが気持ちを落ち着かせてくれるようで好きだった。

スマレはそんなフェリチータに何を言うでもなく、斜向かいに座って自分のカップを持ち上げた。

フェリチータはデュエロで勝利したものの、モンドが叶えてくれると言う勝者の望みを言わなかった。否、言えなかったと言う方が正しいか。

パーパの命と、パーチェの命。どちらか一方だなん

て選べなかったし、そう望んだ所で叶えられる類のものとも思えない。それが分かっているだけに、フェリチータはきつく唇をかんだ。

「…マンマ、私どうしたらいいのかな。パーパの事も助けてほしいし、パーチェの事も放つてはおけない。…パーチェは、本当にその三十過ぎ位までしか生きられないの…??」

その大きな瞳はいつもの強気な光は形を潜めて潤み、何かのきっかけで涙が零れ落ちてしまいうさだ。

「…ラ・フォルツアのカードの意志は実は私にも、良く読みとれないの。でも、ラ・フォルツアの力の代償がパーチェの命と言うことが分かったのも、つい最近の事」

「じゃあ、パーチェがアルカナ能力を使わなければ、代償は支払われないって事になるの？」

縋るように言ったフェリチータの問いにスマレは力なく首を振った。